

## 追悼



### 訃報

名誉教授 田部 浩三 (化学科20期) (享年91)

名誉教授 田部浩三氏は、平成30年4月24日逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

田部浩三先生は、本年4月24日逝去されました。

先生は大正15年5月7日、兵庫県山崎町の志賀家の次男としてお生まれになり、北海道上川郡当麻尋常高等小学校、旭川中学、東旭川青年学校指導員嘱託、陸軍経理学校予科を経て、昭和23年に北海道大学理学部化学科に入学され、26年に卒業されました。この間、大分県竹田市の田部家との養子縁組により田部姓に改名されました。卒業後直ちに触媒研究所の助手となられ、クロロホルムの分解反応機構の研究を始められ、昭和31年に理学博士の学位を授与されました。ジョージア工科大学、サウスカロライナ大学で研鑽を積み、昭和35年に触媒研究所教授、同40年に化学科教授となられ、以降、平成2年に定年退官されるまで物理化学講座を担当されました。この間、ノースダコタ大学客員教授、京都大学工学部併任教授、東京工業大学客員教授、吉林大学名誉教授を務められました。ご退官後は、株式会社日本触媒の研究顧問としてご活躍される傍ら、ブラジルのニオブの会社CBMMなど国内外の数多くの企業の研究顧問を務められました。

田部先生は固体の酸塩基触媒の研究の初期からこの分野に参画され、酸と塩基の協奏作用で反応分子を活性化し、特異的活性と選択性を示すことを提唱されました。昭和58年に出版された『Solid Acids and Bases』は、世界で初めての固体酸塩基触媒に関する単行本で、適度の強度を持つ酸点と塩基点のバランスが重要との指摘は、その後の金属酸化物と複合金属酸化物の触媒作用の理解を支える礎となっています。

先生の研究成果に対し、松永賞、東レ科学技術賞、日本化学会賞、触媒学会賞、石油学会賞をはじめ、昭和63年には紫綬褒章(触媒の化学)が授与されました。業績は国際的に評価され、平成12年に、世界の酸塩基触媒研究者のグループの国際酸塩基触媒シンポジウム実行委員会によりKozo Tanabe Prize for Acid-Base Catalysisが創設されました。

本学においては、研究室に在籍した学生は16名の研究生を含めると169名のほり、その一人一人に熱心に教育されるとともに、昭和62年6月から2年間評議員の要職を併任し、大学の管理、運営、発展に尽力しました。

学外においては、昭和53年2月から2年間文部省学術審議会専門委員を務め、関連分野の発展に寄与し、学会活動においても、昭和59年3月から1年間日本化学会北海道支部長、同63年1月から1年間触媒学会長を務め、斯界の発展に尽力し、平成8年に触媒学会名誉会員に推挙されました。

田部先生の生涯にわたる社会への貢献に対し、平成8年勲二等瑞宝章が贈呈されました。没後、正四位に叙されました。

先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、多大な貢献に感謝申し上げ、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(北大時報No.776、平成30年11月発行、52頁より転載)



田部浩三先生は『北大時報』掲載の訃報記事にもあるように、固体酸塩基触媒研究の分野で世界的に中心的な役割を果たしました。伝統ある物理化学講座において、先代の堀内壽郎先生による触媒の作用機構の解明を踏襲しつつも、対象とする物質を金属から金属酸化物・金属塩類にまで拡張し、かつ新規触媒の設計・創出を新たに加えられ研究内容を大きく発展させられました。

後任教授である私たちは先生に何度も御自宅にお呼び頂き、物理化学講座の歴史や研究に対する心構えをご教示いた

きました。理学的基礎研究の本質的重要性に関して「研究は建物。屋根と壁が応用なら、土台が基礎。屋根や壁のない建物はない。上にものがのって初めて基礎と呼べる、即ち、応用に繋がらない基礎研究は、本当の基礎研究ではない」とおっしゃっていたことが強く印象に残っています。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

物理化学研究室

第4代教授 魚崎浩平

第5代教授 村越 敬